

2011特別見学ツアー報告書

[元興寺]

蘇我馬子が6世紀末に飛鳥に建立した日本最古の本格的寺院、法興寺(飛鳥寺)の後身である元興寺





東門/重要文化財/室町時代/東大寺の門を移築したもの







重文 東門

この門は鎌倉時代の建物の遺構として、雄大な
気風と、すぐれた意匠を持つ四脚門である。
もと東大寺西園院にあった門を、三輪寺の
極樂坊正門として延永十八年（四一〇）
この場所に移築されたものである。東門の
遺蹟により極樂坊本堂を中心とする二両が
元興寺旧伽藍から築立した中世寺院として
再生したことをしめしている。

拝観受付





西国薬師第五番霊場

本堂(極楽坊本堂または極楽堂ともいう)/国宝/奈良時代/鎌倉時代に僧坊を改築したもの



造りが6間幅で真ん中に柱があるのが珍しいらしいという

吹寄菱格子欄間



中備えは間斗束と板葦股の二段になっている





NO SMOKING
禁煙







元興寺講堂跡礎石

(奈良時代)

境内西側の中新屋町で平成十年に発掘されたもので、本来の位置は保っていないが出土場所や礎石の規模などから、元興寺講堂に使用されたものと考えられる。

礎石は長さ一・五から一・一メートル、幅二メートルから一・六メートル、厚さ〇・七から一・九メートルの柱座が造り出されている。礎石の石材は三笠安山岩で、通称「ナンボ石」と呼ばれる硬質の自然石を利用している。

創建の頃の講堂は、開口部一間で丈六葉師如来坐像を本尊とし、左右に二尊の菩薩、二神将が安置されたといわれている。元興寺の主要な藍染の産地である。礎石から室を除いてすべてが礎石から

創建の頃

礎石を

礎石から

礎石から



第一収蔵庫

第一収蔵

国宝 五重小塔 建造物

重文 智光曼荼羅 板

重文 阿弥陀如来坐像

重文 聖徳太子立像

重文 弘法大師坐像

第二収蔵庫

重要有形民俗文化財

元興寺庶民信仰資料

板絵、印佛、こけら

結骨塔婆、物忌札等

鎌倉

六五





インターネットより

五重小塔/国宝/奈良時代/収蔵庫に安置されている





改修により禅宗様の要素が入っている



禅室/国宝/奈良時代/現・本堂も含んで東西に長いひと続きの僧房であったものを鎌倉時代に改築したものである





日本最古、飛鳥時代の瓦/屋根瓦の一部にも飛鳥～奈良時代の行基葺古瓦が使用されている





大仏様の挿肘木となっている











国宝 極楽坊禅室
(僧坊)

この堂は元興寺東室南階大坊の四房分が残った僧坊で、禅室とも呼ばれ、念仏道場として著名であった。鎌倉時代に改築され大仏様式の手法を軒廻りによく残している。主要な構造部材及び礎石は奈良時代の創建当初のものが残り今も用いられている。奈良時代の官大寺僧坊遺構を伝え、内部の間取りに奈良―鎌倉時代僧坊のおもかげをよく残す貴重なものである。本堂と同様に南流れの屋根の一部に行基葺古瓦が残る。古瓦には最古の丸瓦、平瓦を含め飛鳥時代から奈良時代のものも伝世している。

国宝 極楽坊禅室

(僧坊)

この堂は元興寺東室南階大坊の四房分が残った僧坊で、禅室とも呼ばれ、念仏道場として著名であった。鎌倉時代に改築され大仏様式の手法を軒廻りによく残している。主要な構造部材及び礎石は奈良時代の創建当初のものが残り今も用いられている。

奈良時代の官大寺僧坊遺構を伝え、内部の間取りに奈良―鎌倉時代僧坊のおもかげをよく残す貴重なものである。本堂と同様に南流れの屋根の一部に行基葺古瓦が残る。古瓦には最古の丸瓦、平瓦を含め飛鳥時代から奈良時代のものも伝世している。











正面は通り庇(軒を正面の幅全長に亘って庇状に張り出したもの)となっている



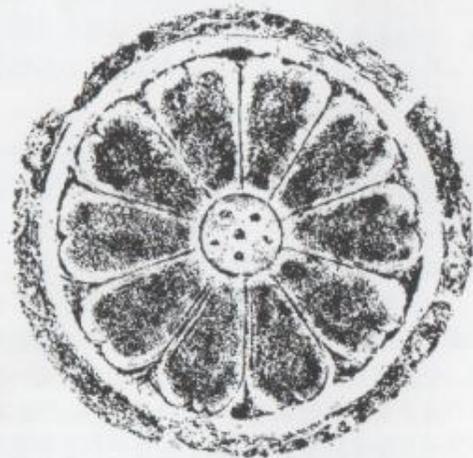




世界遺産「古都奈良の文化財」

元興寺

が ん ご う じ



宗教法人 真言律宗 元興寺
財団法人 元興寺文化財研究所

〒630-8392 奈良市中院町11 電話 (0742) 23-1377・6
FAX (0742) 23-1378
<http://www.gangoji.or.jp>

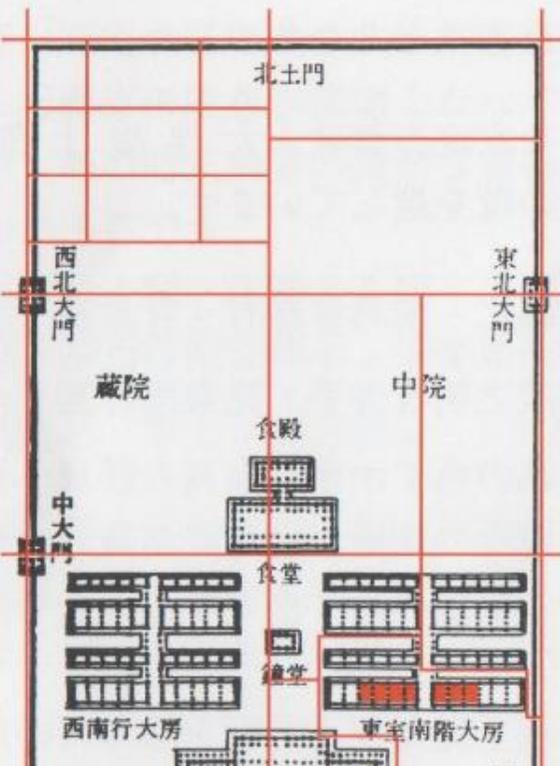
元興寺略

西曆 年号 元興寺

五八 宣化三
 (欽明七)
 五八 崇峻元
 六五 推古三三
 六五 齊明三
 六三 天智元
 六〇 天武九
 七八 養老二

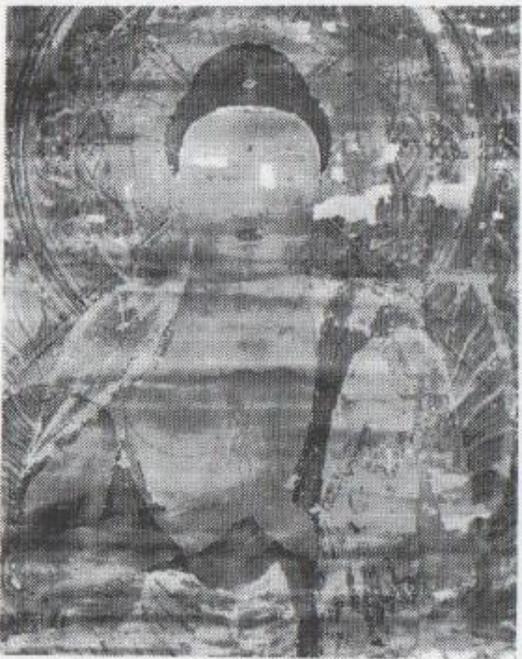
仏教公伝。

飛鳥に法興寺（飛鳥寺）を起工す。
 惠灌入寺し、のち三論を広む。
 孟蘭盆会を設け観貨邏人を饗す。
 道昭帰国して法相を伝え、また禅院を建つ。
 官寺を定め飛鳥寺を官治に入れる。
 法興寺を平城に移し寺名を元興寺と改む。

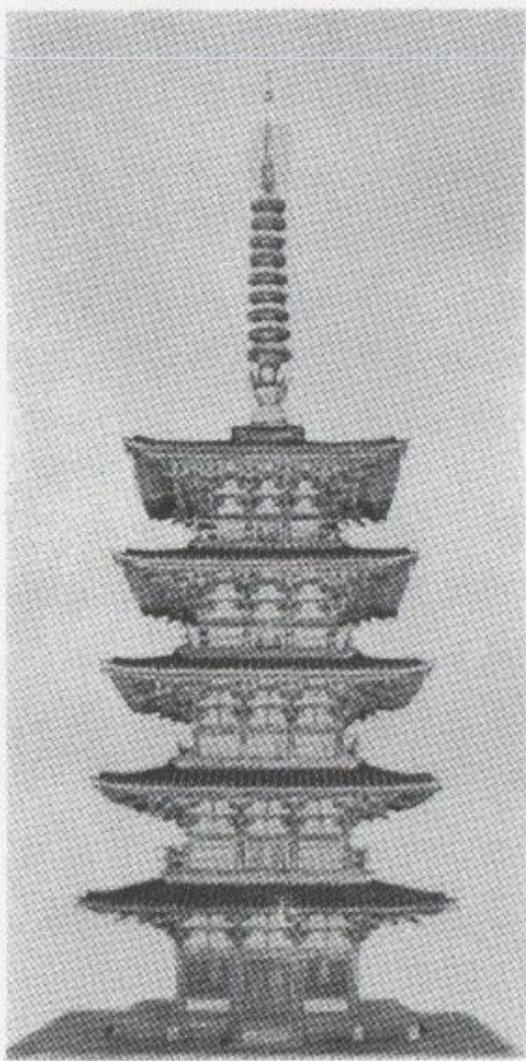


七四七 天平一九
 天平年間

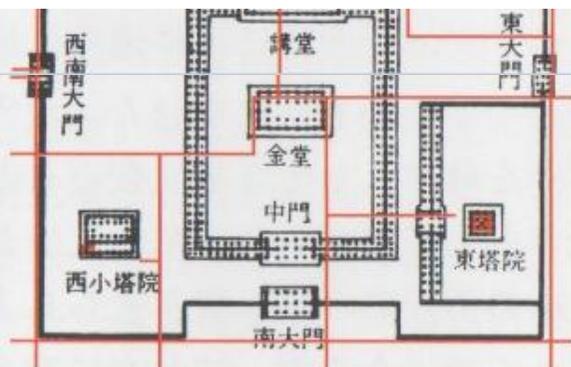
「元興寺伽藍縁起並流記資財帳」成る。
 智光曼荼羅が作られたと伝う。



(重文・板絵智光曼荼羅)



(国宝・五重小塔)



(伽藍圖)



(古瓦)

元興寺の歴史

仏教公伝 よる壬申の年-552、一説には元興寺縁起による戊午の年宣化天皇3年-538)といわれます。

仏教受容をめぐる争い 新しく渡来した異国の宗教の受容の問題をめぐる、当時の進歩派であった蘇我氏が崇仏を主張し、一方、保守派であった物部氏は排仏を固執し、両者の対立が次第に激しくなり、仏教もそのためにいろいろな迫害を受けることとなりました。

蘇我馬子排仏派を破る しかし、用明天皇2年(587)になって、蘇我馬子はその甥の子であるとともに娘の婿にもあたる厩戸王(後の聖徳太子)とともに軍を起こし、排仏派の頭領であった物部守屋を打ち破り、ようやくのことで日本の仏教受容の道を開くこととなります。

飛鳥寺(元興寺の前身)の創建 その翌年、馬子はその甥にあたる崇峻天皇が即位したのを機会に、高市郡の飛鳥の地にはじめて正式の仏寺建立に着手しました(588)。この寺がこの元興寺の前身である法興寺で地名によって飛鳥寺ともいわれる寺です。

百済の国王はこの日本最初の仏寺建立を授けるために仏舍利を献じたのをはじめ、僧・寺工・鍍盤博士・瓦博士・画工を派遣してきました。その時の瓦博士の造った日本最初の瓦は、その後この寺が奈良の現在地に移った際も運び移されて、現在の本堂・禅室の屋根にいまも数千枚が使用されています。特に重なりあった丸瓦の葺き方は行基葺きともいわれて有名です。

高市の飛鳥における飛鳥寺 この飛鳥寺は、三論・法相の両学派が最初に伝えられてわが国仏教の源流となっただけでなく、蘇我氏を通じての大陸文化輸入の中心舞台となり、さらに政治・外交の場ともなったようです。いわゆる飛鳥時代の文化は、まさに飛鳥寺を中心とした展開したといつて過言ではないようです。

平城遷都と元興寺の移建 元明天皇の和銅3年(710)、奈良に都が移されると、この寺も養老2年(718)には新京に移されて、寺名を法興寺から元興寺に改めました。その際、飛鳥の地名からとった飛鳥寺の名はそのまま継承され、かえって新しく移った元興寺の寺地が平城の飛鳥と呼ばれることとなりました。

平城の飛鳥 有名な女流万葉歌人大伴坂上郎女は奈良の元興寺の里を詠んだ次の歌を遺しています。

古郷之 飛鳥者雖有 青丹吉
平城之明日香乎 見樂思好義 (万葉集6)

高市郡のあすかから奈良の新京へ移って来た貴族たちにとっては、元興寺の伽藍が立ち並ぶ新しい奈良のあすかを賞でる気持ちと同時に故郷のあすかをなつかしむ気持ちも強かったものと思われれます。

大伴坂上郎女がこの歌を詠んだのは天平5年(733)のこととされていますが、その頃には移建の工事も重要な部分については、ほぼ終わっていたかもしれません。大官大寺や薬師寺のような本来的な官寺を移すことでさえ大変なことであるのに、もともと蘇我氏の氏寺として建てられ、蘇我入鹿が誅戮されることもあって一時は高市の旧飛鳥の地へ置き去られようとしたこの寺が、8年も遅れてではあるが、にわかには奈良の地へ移建されることとなった理由、その財源などの問題は、憶測の域を出ないとしても非常に興味ある問題をもっているようです。

奈良の元興寺 ともあれ、元興寺はたちまちにして移建工事を進捗させ、僧侶たちは依然として諸大寺の学問をリードして、奈良の新京における指導権を握ったようです。当時の伽藍を偲ぶものとしては、東大塔跡(史跡指定)・西小塔院跡(史跡指定)・極楽堂(国宝)・禪室(国宝)しか遺っていませんが、今一つ収蔵庫に安置する五重小塔(国宝)は当時の西小塔堂の本尊、西塔そのものとされ、今に遺る奈良時代最盛期の唯一の五重の塔として有名です。

天平勝宝元年(749)には諸寺のもつ墾田の地限が定められ、諸

大寺の新しい格付けが行われますが、その時、東大寺の4千町歩に対し、元興寺は2千町歩、大安・薬師・興福の諸寺1千町歩、法隆寺・四天王寺は5百町歩と定められました。当時の元興寺の位置を示すものといえましょう。

大仏開眼と元興寺

天平勝宝4年(752)、東大寺の大仏が完成し、その開眼法要が営まれた時は、元興寺の隆尊が講師となってその宝前に華嚴経を講じたのですが、その時元興寺の僧が3首の献歌を行いました。次の歌はその中の1首です。

美那毛度乃 乃利乃於古利之 度布夜度利
阿須加之天良乃 宇太々天万都留 (東大寺要録)

孝謙天皇・聖武太上天皇以下文武百官の居並ぶ大仏殿の式場でこの歌が朗詠披露されたことと思いますが、新京における元興寺があすか寺と号していたことと同時に、仏教の源流を自負するこの寺の僧侶たちの心意気が大層よくわかります。

智光と智光曼荼羅

奈良時代の終り頃に出たこの寺の智光は、はじめは三論の学僧として有名でしたが、晩年浄土教の研究に専念し、日本最初の浄土教の本格的な研究者として世に知られています。智光はまた、後に智光曼荼羅として有名な浄土变相図を遺し(2面・重文)、智光の住んだ僧坊の一房が極楽房と呼ばれ、智光曼荼羅が本尊として祀られるようになります。

南都七大寺の一つとしての元興寺

平安時代の前半期までは、元興寺は南都七大寺の中でも各方面で指導的な役割を果たし、護命をはじめ数々の名僧を出して日本仏教の発展に寄与しただけでなく、お盆で知られる盂蘭盆会、釈尊の降誕を祝う灌仏会、組織的慈善事業のはじまりとも思われる文殊会、また仏名会なども、すべてこの寺からおこりました。当時の平安京に住む貴族たちにとっては南都の七大寺を巡礼することが心のふる里を訪ねることであり、最上の楽しみでもあったようです。

平安時代の後期になると、官寺の支えであった中央政府の権力が衰えて、荘園、寺領からの収入が困難になり、天台、真言系の

新しい寺院の興隆、貴族と特別の関係をもつ寺院の強大化などにより、他の官寺と同様衰退の道を辿ることになります。

極楽坊の成立

その崩壊の過程でひとり元興寺の命脈を支えることになったのが、智光の遺した智光曼荼羅でした。平安時代の後期になって法隆寺の僧坊の一部が改造されて聖徳太子を祀る聖蓋院が造られたころ、この寺でも僧坊の一部が改造されて智光曼荼羅を祀る極楽房が成立しました。折から澎湃として起る浄土信仰の波に乗って、この一面が極楽坊と呼ばれるようになり、僧坊の一部を改造した極楽房は極楽堂とも曼荼羅堂とも呼ばれて南都系浄土信仰の中心となっていきます。

庶民に支えられた元興寺

その頃になると、この寺を支えるものは政府でも貴族でもなくて、むしろ無名の、庶民と呼ばれる階層の人たちが中心となったようです。鎌倉期以後の中世を通じてこの寺は智光曼荼羅を中心とする浄土信仰のほかに地藏信仰、聖徳太子信仰、弘法大師の真言信仰などが入り交った混然とした状態で群集をあつめ、辛うじて近世にその加整と伝統を伝えることとなります。今に遺る聖徳太子孝養像(重文)や弘法大師坐像(重文)は平安時代初期に作られた半丈六阿彌陀如来坐像(重文)などとともに当時の信仰の様態をよく物語るものといえましょう。また、東門(重文)が東大寺西南院から移されてくるのも、中世末期になります。

中世庶民信仰資料と文化財研究所

戦後、文化財保護法のもとで、史跡元興寺極楽坊境内が指定され、建造物・美術工芸品等の解体修理保存、防災工事等が重ねて行われてきました。その過程で発見された数万点を越す中世庶民信仰資料(重要有形民俗文化財)や仏像等は2棟の収蔵庫に保存されています。この稀有で貴重な資料の整理と調査保存のため寺内に、財団法人元興寺文化財研究所(特定公益増進法人)が設置され、今や全国各地の文化財保存、修復、調査を手がける民間唯一の研究機関となって、地道な活動と実績を上げています。

1998年、この寺は、歴史の究明と文化財保護の成果を評価され、ユネスコの世界文化遺産「古都奈良の文化財」のひとつとして登録されました。

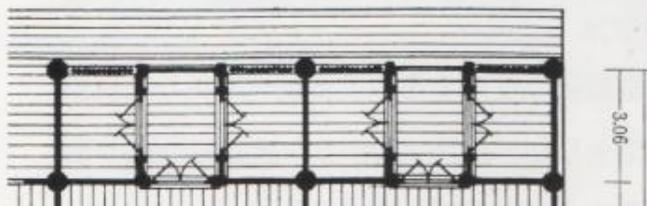


平城遷都
1300年祭

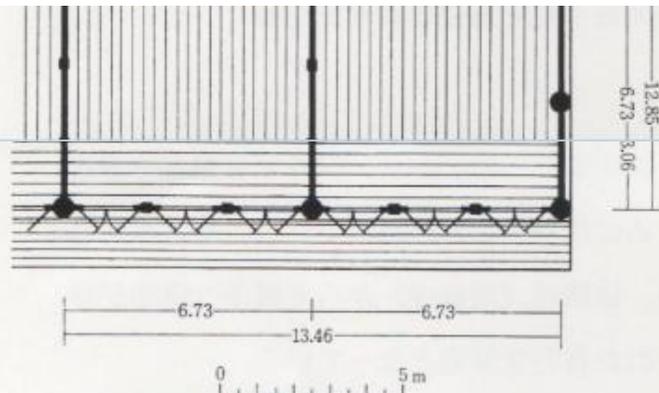
平城遷都 1300 年祭 祈りの回廊奈良大和路秘宝・秘仏特別開帳

国宝 元興寺禅室

奈良時代に創建された元興寺そうぼう僧房の遺構である。当時の僧房は、金堂や講堂がある中心伽藍ひがしむらなんかいだいぼうの北側に 4 棟建てられ、それぞれに小子房が付属する規模の大きなものであった。現在の禅室は、当時の東室南階大房の一部にあたり、当初は東西各六房で計十二房を有した長さ 88m 余という長大な建物であった。



禅室外観 現在は 4 室分が残存している。



元興寺僧房復原平面図
 (『大和古寺大観』岩波書店より)

現在の禅室は創建時の三房分を吹き放って一室とし、畳敷きとしているが、奈良時代に創建された時は平面図のように、丸柱列で縦に仕切ったのが一房分で、中央室が広い（この中央室が今の極楽堂の内陣）。

僧侶の三学（戒・定・慧）から想像すれば、北側に寢室二名分、中央は禅室、南側は読経室と考えられよう。

鎌倉時代の初頭には、八房分が残存しており、東半部は切り離されて堂に改造され、西側四房が禅室として機能していたようであるが、柱の位置や規模、丸柱の間を角柱で三等分する構造など、当初の形を随所にとどめている。極楽堂の内部を仔細に観察すると、僧房時代の痕跡が多く残されており、床下には僧房時の礎石も残っているなど、その歴史を雄弁に物語ってくれる。



禅室室内（桑原英文氏撮影）

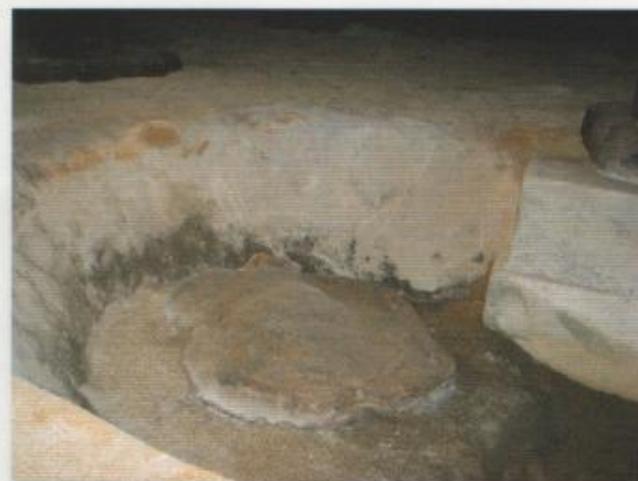
禅室の屋根裏や収蔵庫には解体修理でおろされた古い部材や瓦が保管されている。古材には様式的な研究成果で年代が明らかにされたもののほか、年輪年代法という手法で製作年代が具体的に推定できたものもある。また、瓦は飛鳥寺出土品との比較によって、飛鳥時代のものであることが明らかになった。

元興寺禅室には 1400 年におよぶ歴史が蓄積されているのである。



屋根瓦

禅室と極楽堂の屋根の一部には、行基ぎょうき葺きと呼ばれる古拙な方法で葺かれた丸瓦が残る。飛鳥から移築された瓦もまだ現役で活躍中である。



極楽堂床下の礎石

禅室南辺の柱列をそのまま東へ延長した位置から出土した。直径 1.5m で、僧房の当初の姿を考えるうえで重要な遺構である。



禅室の古材（巻斗）

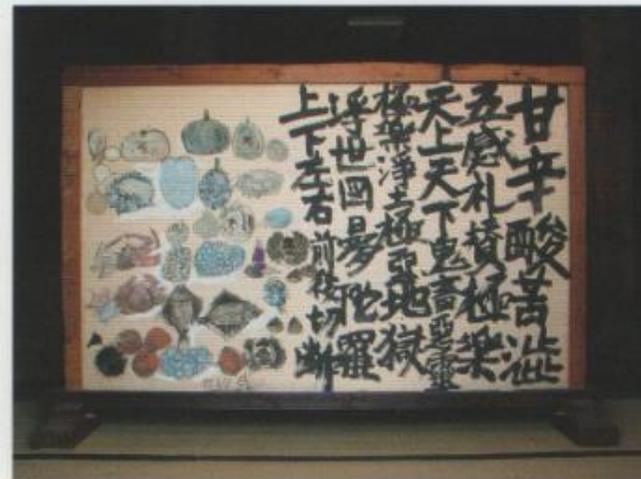
西暦 588 年までの年輪が確認され、『日本書紀』の記事との検討から、590 年に飛鳥寺建設のために伐り出された材木で作られたと考えられる。法興寺（飛鳥寺）から元興寺へ建物が移築された有力な証拠となっている。

ついで 須田剋太の衝立

（すだ こくた / 1906 ~ 1990 年、
埼玉県生まれの洋画家）

司馬遼太郎の『街道をゆく』の挿図を担当した
ことでも著名な画家で、力強く奔放なタッチの作
風に特徴がある。

1987 年に、当寺の古材でつくられた衝立に 12
面の作品が奉納された。



平城遷都 1300 年祭 奈良大和路秘宝・秘仏特別開帳

元興寺禅室 室内公開

平成 22 年 10 月 1 日 ~ 11 月 30 日

発行 (宗) 元興寺・(財) 元興寺文化財研究所

〒630-8392 奈良市中院町 11 番地

TEL:0742-23-1376 FAX:0742-27-1179





参考ホームページ

<http://www.eonet.ne.jp/~bird-etc/treasure-gangoujigokurakubouhondou.html>